

# 大学における幼児グループ活動の展開Ⅰ

## —就園前の親子集団体験の意味と効果について—

田尻 さやか 吉川 晴美

就園前に何らかの形で継続的に親子集団活動に参加したことのある親にアンケート調査を行い、その自由記述に着目した。その結果から、幼児グループ活動は、親・子どもそれぞれにとって意味があり、①活動を共有し関係性の発展がなされること、②活動内容の広がり、質的（意味）の転換・創造がなされること、③自己・人・ものがバランスよくかかわりあい発展することなどが、幼児グループの特徴や効果として親に意識されていることが分かった。また、複数のリーダーで構成している子どもグループ活動の実践（エピソード）から、上記の三つ（①～③）の特徴が捉えられ、その特徴（効果）を具現化する、リーダーチームの展開とひとり一人のかかわりにより集団全体も高まっていくような相互的、応答的（接在）体験の経過が確認された。それが参加者の未来へ向けての基盤となり、新しい集団においても共に育ちあいながら、その輪や体験を広げ、幼稚園などのさらに大きな集団へ向かう力になっていくのではないかと考える。

キーワード：大学の幼児グループ活動 親子集団体験の効果 よい集団体験 共に育つ 子育て支援

### 1. はじめに

近年子どもを取り巻く環境が大きく変化し、地域において自然発生的な異年齢の遊び集団や子どもの自発性・創造性を育むような遊び集団などが急激に減少している。地域の人間関係が希薄化し、気軽に安心して子ども同士、親同士が集まり活動できる機会や適切な環境が少なくなっているといわれる。

そのような時代の中で、保育所、子育て支援センター、子どもセンターをはじめ様々な場で、様々な形の保育サービスや子育て支援が用意され、活用され始めている。しかし、一方では公園などの公共の場から、だんだんと親子の姿が消え、友だちを作るためにお稽古ごとに通うという母親の声を耳にすることも珍しくなくなってきた。

本学幼児グループ活動は、学内のプレイルームを拠点とし、近隣の地域（町田市、八王子市、相模原市など）に開く子育て・発達支援活動であり、

大学内で約20年間という長い間、継続的に行われていることに特色がある。

またそれは、子どもや親への対応ばかりでなく、そこに参加する教員、学生などの成長にも有効な活動として展開・発展している保育集団活動である。すなわち、参加者各々が生涯発達や人格形成の基礎を育み、豊かな人間関係を体験できる、よい集団体験の場としての役割を果たしていくことを一つの目的としている。

本研究では、大学における子育て支援のありかた、親子にとっての集団活動の意味と効果について考えていく。

### 2. 幼児グループの理論と方法

#### (1) 幼児グループについて

本学幼児グループ活動は、家政学部家政学科家政学専攻児童学コース4年次の授業の「児童学実習」（平成20年度より児童学科「児童臨床実習」）にあたり、教員（平成19年度：教員・子どもグループ担当 吉川、田尻、母グループ担当 鈴木、

柳瀬), 学生 (大学院生, 4 年生) がリーダーチームを構成し, 週 1 回 (年間全 20 回, 1 回 90 分) で活動を展開している。

この集団活動の理論と方法については, 1964 年にお茶の水女子大学児童臨床研究室 (指導教官: 松村康平) で始まった児童臨床研究会・小集団活動・集団指導に基づいている。<sup>1), 2)</sup>

幼児グループ参加の対象となる就園前の 2, 3 歳の時期は, 大きく心も体も成長し, 外に友達も求めるようになる。

また「自分で」「ダメ」など自分の考え, 気持ちをはっきりと行動やことばで主張するようになるので, それにかかわる大人たちとの関係は変化し, 親にとっては「困ったこと」としてとらえられることも少なくない。さらに, 幼稚園等の大きな集団への参加, 生活の自立 (排泄, 衣類の着脱, 食事面) など, 日常生活の中での課題が多く見られ, 社会性の基礎を培う時期でもある。

この時期に出会う幼児グループ活動は, 親子ともにその発達にとって重要な役割を担っている。

幼児グループ活動は, 「ひとりひとりが伸びることにより集団全体が発展し, 集団全体が発展することにより, ひとりひとりが伸びていくこと。」を基本原理としている。この「個と集団の相即的發展」を促すには, 集団の指導者 (リーダーチーム) が, 集団の性質や構造, 働きをよく知って, 集団の課題状況の関係構造を把握し, 人間関係を発展させるかかわりが求められる。刻々と変化する集団状況を瞬時にとらえ, 集団と個のかかわり方, あるいは, 個と小集団, 集団全体の相互のかかわり方を様々に工夫し, 仲間関係の発展を促していくこと, 参加者全員が共にかかわりあって育ちあうことをめざすことが可能となるよう, 様々な状況作りがなされていくことが重要である。<sup>3)</sup>

## (2) 子どもグループのリーダーチームによる指導の特色

幼児グループ活動は, 親子合同活動, 子どもグループ活動, 親グループ活動の 3 つの活動から成り立っており, そこで展開される活動を通して, 参加者たちは「①様々な考え, 価値観を持つ人が出会う中で, 新たな視点に気づき, グループを越

えてより広がり豊かな人間関係を発展させていくとする態度が育っていること, ②グループ活動のなかで親と子の出会いは互いに新鮮で, 多面的重層的なかわりを促進させていっている。」<sup>4)</sup>

また, 本活動には複数のリーダー (学生・教員) が参加し, 活動の場面に応じた多様な役割が果たされ, メンバー一人ひとりと集団活動の発展が相互に関連し, もたらされるよう配慮され展開されていることも特徴である。

本研究者は, 子どもグループ活動の指導者チームの一員として活動に参加している。本研究では, 子どもグループ活動の実践を中心に分析・考察を進める。

子どもグループでは遊びや心理劇を中心とした, 個と集団の相即的發展を促す関係発展の保育を通して, 幼児の全体的な発達と豊かな人格形成を培うことを目指し, 集団の役割機能 (方向性・内容性・関係性) を連担したチーム保育を進めている。

リーダーは, 活動を促進する機能として①方向性機能 (集団の方向性を明らかにする機能・主に L1 の役割) ②関係性機能 (集団活動において, 人との関係, コーナーとの関係, 場面, 方向との関係など, さまざまな関係の発展を促進する機能・主に L2 の役割) ③内容性機能 (集団活動における子どもたちの自発活動を促進し内容を作っていく機能・主に L3 の役割) の 3 つの機能を担い合いながら, 子どもたち・親, もの (課題) との関係性を促進し, 集団活動を発展させていくよう役割を果たすことが求められる。

また, 複数のリーダーで運営している活動であり, 活動が始まる前までの段階で役割を決め, 役割が機能的に果たされるように話し合い・準備がなされ, 活動中は 3 つの機能を状況の変化に即して柔軟にとれるように, 役割を変えながら, 集団活動を促進していくことがなされている。<sup>5)</sup>

## 3. 研究の目的

本研究では本研究者ら (吉川, 田尻, 他) が, 調布市子ども家庭支援センター「すこやか」(花山美奈子他) と共同で行った子育て支援についての継続的研究 (調査 I<sup>6)</sup> は 2002 年実施) として 2005 年に行った調査 II の中から, ①就園前の

グループ体験についての自由記述を取り上げ、幼児グループ活動やすこやかなどでのグループ体験の意味、その効果について考察をすすめる。さらに、②子どもグループの実践から、特に個と集団の相即的な発展が見られたと仮定される二つの活動(エピソード)を抽出し、リーダーチーム(教員・学生)のかかわり方、技法、活動の展開の過程をとらえ、よい集団体験の場としての幼児グループの意味と効果について考察する。

#### 4. 研究の方法

①調布市子ども家庭支援センター「すこやか」来館者(79名)、調布市内の保育所の地域交流室利用者(22名)、本学幼児グループ参加者(15名)を対象に質問紙(すこやか職員、吉川、田尻による共同作成)を実施(2005年12月実施)。

表1 アンケート項目

あなたのお子さんが幼い頃のグループ体験についてお聞きします。	
(1) あなたのお子さんは現在、また小学校に入学する前はどこで、何年間の保育を受けられていますか(いましたか)。あてはまるものに印をおつけください。	
<input type="checkbox"/> まだ通園していない <input type="checkbox"/> 幼稚園に通園している(いた) <input type="checkbox"/> 保育園に通園している(いた) <input type="checkbox"/> その他( )に通園している(いた)。*それは( )年保育である(だった)	
(2) あなたのお子さんは、幼稚園や保育園に入園する前に、何らかのグループ活動に継続的に参加したことがありますか、または現在参加していますか	
<input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> ない	
(3) (2) であると答えた方は、以下の①・②にお答えください。	
①それは次のどのような場ですか(したか)。(複数回答可)	
<input type="checkbox"/> 大学幼児グループ <input type="checkbox"/> 地域の自主グループ <input type="checkbox"/> 幼児教室 <input type="checkbox"/> 子育て支援センターのグループ <input type="checkbox"/> 保健センターのグループ <input type="checkbox"/> 幼稚園、保育園の子育て広場 <input type="checkbox"/> その他( )	
②それはどのようなものであるか(あったか)さしつかえなかったらお知らせください。複数の場合は、そのうち一番親子に影響を与えたと思われるもの1つについてお書きください。大学幼児グループに参加された方は幼児グループについてお書きください。	
期間・頻度・活動場所( )	( )
活動の特色( )	( )
親子の参加の仕方( )	( )
親子それぞれ楽しく行けたかどうか( )	( )
親子に育ったものの効果( )	( )

調査のグループ体験について尋ねた項目に着目し、(表1)その中の自由記述部分から、集団体験に関する内容(1,集団体験の場所,2,活動の特色,3,活動の効果)(表1-(3)②)についてカード化し、整理、考察する。

②本学幼児グループの母子合同活動・子どもグループ活動において活動の内容が参加者のかかわりによって発展し、広がりをみせたと仮定される活動であり、リーダーチームの役割の連担の様子が特徴的に見られた「ラディッシュ栽培活動」「映画館遊び」場面のエピソードをビデオ記録・参加観察記録から抽出し、幼児グループ体験の意味と効果について分析・考察する。(期間:200X年4月~12月,1回90分,参加親子10組,教員4名,参加学生9名内2名観察者)

#### 5. 結果

(1) アンケートの自由記述に見られる就園前の集団体験とその効果について

調査の対象者のなかで就園前に何らかの集団体験をしたことのある親子は116組中57組であり、49%の親子が集団体験をしている。(図1)

また、そのうち集団体験を体験した場所は幼児グループ、すこやか、児童館の順で多く、調査対象の属性に大きく影響されているが、幼児グループとカルチャーセンターを除いて回答のあった58%の場所の性質を見てみると、公民館などの公共の場所であり、身近に出入りできる場所が利用しやすいと考えられる。大学も地域にある教育・施設が充実し、安心した場所ととらえると、97%の回答が「子どもが安心して遊べる場所」であり、「親子がともに楽しく過ごせる時間を提供してもらえそうなところ」に集団体験の場所を求めていることが明らかになった。(図2)

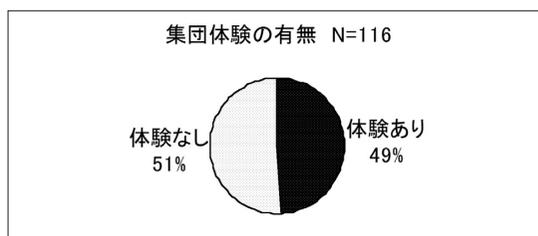


図1 就園前の集団体験の有無

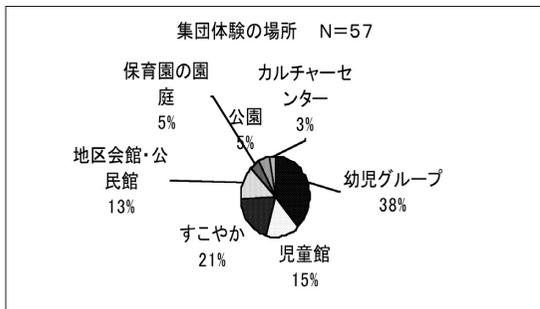


図2 就園前の集団体験をした場所

体験した集団活動の特色についての自由記述の内容を回収した場所別に表2～4に示す。

表2 幼児グループ参加者から回収した「活動の特色」の記述内容

記述内容	カードの数
親子別れて活動	4
学生が参加して子どもと一緒に参加する	2
家では出来ない遊び	1
親子で一緒に活動と分かれての活動	4
テーマが与えられるのではなく自主的に(母)	2
畑でラディッシュを育てたり、クリスマス会、七夕などの季節の行事	2
母たちはディスカッションやロールプレイング、イベントの用意をする	1
子どもが自主的(押し付けではなく)に活動している	3
その子を尊重しながら遊びを通して集団体験をする	2
親も子どもも共に育つという考えに基づき、活動を通して子どもとのかかわり方を学ぶことができる	1

表3 すこやかで回収した「活動の特色」の記述内容

記述内容	カードの数
親子参加(体操、リズム学習、英語リミック、リミック、手遊び、わらべ歌講座、踊り、ゲーム)	10
親の自主サークル(手遊び、ごあいさつ、ダンス、工作、クッキング、親の交流)	6
イベント	1
自由遊び	1

表4 保育所で回収した「活動の特色」の記述内容

記述内容	カードの数
自由遊び	7
昼食	2
イベント	1
生活リズム、集団生活になじむ	1
手遊び、他の親子との出会い	1

参加した集団体験によって得られた効果について記述された内容を表5～7に、さらにその記述内容を下記の6つの枠組みによって整理した。(図3～5)

#### ＜集団体験の効果基準＞

- A: 親—もの関係: 子や様々な人と生活する上での課題の明確化・物の創造・共有活動など。(例 手遊びを覚えた。)
- B: 親—人関係: 親同士の仲間関係を育て、親子、家庭集団関係を促進する活動など。(例 他の親と話ができた。)
- C: 親—自己関係: 親の悩み、不安を受容し、未来に向けて共に自己実現を促進する活動など。(例 人見知りがなくなった。)
- D: 子—もの関係: 生活する上での課題の明確化、遊び、物の制作、技能を習得する活動など。(例 ことばを覚えた。)
- E: 子—人関係: 仲間関係の育ち、リーダーなどの新しい大人との出会い、親子関係を促進する活動など。(例 友達ができた。)
- F: 子—自己関係: 個々が受け入れられ、位置づく、情緒・感情の明確化を促進する活動など。(例 楽しかったことを話す。)

表5 幼児グループ参加者から回収した「集団で得られた効果」についての記述内容

分類	記述内容	カードの数
A:母—もの関係		0
B:母—人関係	いろいろな人と新しい体験ができた	1
	お友達ができた	1
	同じ空間を共有することでお互いの理解が深まった	1
C:母—自己関係	周りの親子とのかかわりが持てる	1
	集団生活での自信	1
D:子—もの関係	いろいろな刺激を受け、人間関係やかわりあいの大切さを学べた	2
	幼稚園のステップになった	1
	いろいろなことができるようになった	1
	初めての集団活動	1
E:子—人関係	友達とのかかわり方	1
	友達ができた	2
F:子—自己関係	四季折々の楽しみを話している	1

表6 すこやかで回収した「集団で得られた効果」についての記述内容

分類	記述内容	カードの数
A:母-もの関係	家でもできるように手遊びを覚えた	1
B:母-人関係	人と話ができた	1
	悩みを分かち合った	1
C:母-自己関係	気分転換に良い	2
	他の子と自分の子を比較して客観的に見るようになった	1
D:子-もの関係	言葉を覚えた	3
	歌・リズムを覚えた	2
	運動能力、体力がついた	1
	社会のルールが身についた	2
	社交性、かかわり方	1
	歩く機会に恵まれた	1
	英語が身についた	1
	あいさつ	1
E:子-人関係	仲間（友達）ができた	5
	仲間と成長した	1
	他の子を意識した	1
	たくさんの子と遊べた	3
F:子-自己関係	刺激になった	1
	外で遊ぶようになった	1
	成長した	2

表7 保育所で回収した「集団で得られた効果」についての記述内容

分類	記述内容	カードの数
A:母-もの関係		0
B:母-人関係	他のお母さんとの交流	1
C:母-自己関係	人見知りなくなった	1
	息抜き	1
	ストレス発散	1
D:子-もの関係	家でできない遊び	1
	おもちゃがある	1
	社交性	1
	遊び方を覚えた	1
	言葉を覚えた	1
	音楽が好きになった	1
	集団になれた	1
	工作好きになった	1
E:子-人関係	他の子どもとの交流	1
	友達が増えた	2
	友達と会うのが楽しみ	1
F:子-自己関係	人見知りなくなった	1
	後追いなくなった	1
	どこでも眠れる	1

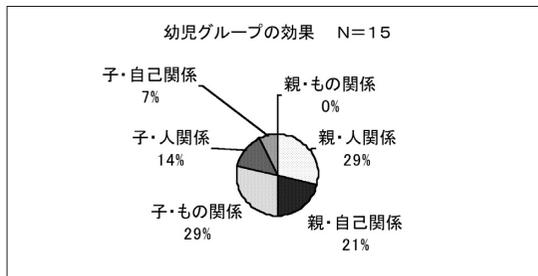


図3 幼児グループで回収した集団体験効果の基準別カード数

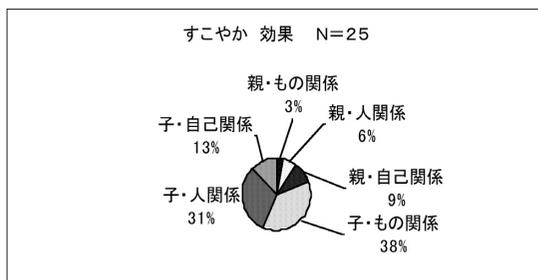


図4 すこやかで回収した集団体験効果の基準別カード数

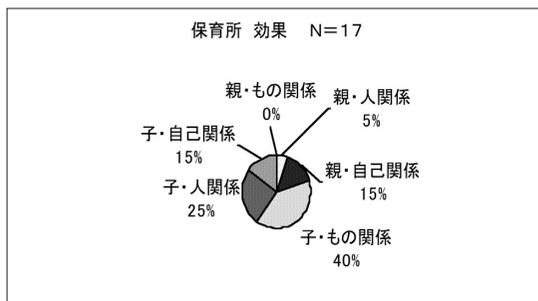


図5 保育所で回収した集団体験効果の基準別カード数

集団体験で得られた効果について記述されたものをカード化し、上記の6つの枠組みにより整理した結果、幼児グループ活動における効果は、すこやか・保育所で回収された結果は子どもに関する（枠組みD・E・F）カードが約80%を占めているのに対し、親に関する（枠組みA・B・C）カードと子どもに関するカードが50%ずつという結果が得られ、幼児グループ活動は、親・子どものどちらにとっても集団体験としての効果が得られていると感じたり考えられていることがわかった。

集団体験について、すこやか・保育所の回答では、運動能力の向上や英語などの知識を身につけるなどの子ども・もの関係の深まりや友達を増やすなどの子ども・人関係が強調されるカードがすこやか・保育所の回答の約70%を占めているのに対し、幼児グループの回答は親・もの関係以外のそれぞれの領域にわたって10～20%の回答が得られていることも特徴であり、集団のなかで①自己・人・もののかかわりあいバランスよく②親も子どももリーダーも体験を共有しながら、様々な(関係性の発展)がうかがえる。また、③集団としての1つの方向性が目立つのではなく、親子にとっての活動内容の広がりや質(意味)の転換、創造がなされていったのではないかと、といった特徴が読み取れる。

幼児グループに関する記述を詳しく見てみると、本学の活動の特徴をとらえたものが見られ、A自然を取り入れたラディッシュ栽培活動・七夕活動・焼き芋活動・どんぐり拾いなどの四季折々の活動、B母子分離活動と合同活動、C心理劇(ロールプレイ)を活用した活動内容は、参加親子の印象に深く残っていると考えられる。幼児グループ活動については、集団活動から得られた効果を親・子どもそれぞれの面、及び自己・人・ものとのかかわりから分類してみたところ、「いろいろな刺激を受け、人間関係やかかわりあいの大切さを学ぶことができた」のように、各々の関係性がまた重層的にかかわりあっている特徴も見られた。

## (2) 複数のリーダーによる集団指導の特徴とその効果

### (1) のアンケートの結果から

- ①活動を共有し関係性の発展がなされること
- ②活動内容の広がり、質的(意味)の転換・創造がなされること
- ③自己・人・ものがバランスよくかかわりあい発展すること、などが、幼児グループの効果として親に意識されていることが分った。そこで、上記の3つのことが子どもグループの実践の中で特徴的に見られ、リーダーチームのかかわりがその発展に影響していたと仮定

される2つのエピソードを取り上げ、幼児グループの意味と効果について考察する。

### エピソード1「ラディッシュ栽培活動」

ラディッシュ栽培活動は、母子合同活動で集団の共通基盤を作ることをねらいとした活動。学内の畑に種まき、水やり、おまじない、収穫を約1ヶ月間(6月ごろ、4回)継続的に行う。繰り返しおまじないをすること、毎回成長を見て、触って直接感じることで子どもたちは畑に行くことが楽しみになる。

6月の最後のグループの日。みんなで何度も通った畑に向かうと、緑の葉が大きくなり、土の中から赤い実が見えている。「エイッ」と葉を引き抜くと、大きく実ったラディッシュと子どもたちは出会い、喜びを表情で表す児、母やリーダーに報告する児(図6)、夢中で何個も抜き続ける児(図7)など様々な姿がある。大きな箱に集まったみんなの成果を見て、収穫を喜び合い、最後に学生たちが作ったお土産バックにラディッシュを入れ、家に持ち帰る。

そんな収穫までには思いがけない出来事もあった。あるとき、土の中からミミズが出てきてびっくりして泣き出すA児。じっとミミズを見つめるB児。ミミズの存在には気がつくけれど、水をあげ続けている児もいる。



図6 ラディッシュの収穫の喜びを母に伝える児



図7 ラディッシュを夢中で抜いている児

#### <リーダーのかかわりと技法>

- ① L3：泣いている A 児の側に行き、様子を見ながら「びっくりしたね、何だろうね、こわかったね」などの言葉をかける。A 児の気持ちに寄り添い、内面を支え、集団における自己を明確化し、自発性を促す（補助自我の技法）。
- ② L2：出てきたミミズについて B 児とじっと見ながら話し合う。  
B 児「畑を守っているんじゃない？」  
L2「そうかもしれない。」  
B 児の気持ちに即し、ミミズが出てきたことを生かしながら、場面の状況と参加者の関係の発展を促進する（補助自我の技法・共通基盤状況明確化の技法）。
- ③ L1：大きな声で「ミミズはラディッシュが大きくなるまで、畑の番人にしよう。」とみんなにお知らせする。L3、L2の動きをとらえながら、集団全員の関係性を統合するような方向性をだし、先への活動へ向けてストーリーの展開のきっかけを集団全体で作出す（方向性提示の技法・焦点化の技法）。

#### <関係性の発展>

この活動を通して、植物の成長に自分たちの手で、身体で、自然と直接触れあい、かかわり、ま

た予想できない出来事に出会い、みなで新しい方向を模索し、創造する等の過程が見られる。

#### <内容の拡大、意味（質）の転換>

この場面ではリーダーの3つの機能・役割が連担され、集団が発展していく過程も見られる。①外接（ミミズが怖いと児にとらえられる）②内接（ミミズが怖い気持ちを受けとめられ、自己が明確化していく、他児によってミミズが守り神とされる）③接在（集団全体でミミズを守り神として受け入れ、活動のシンボルとなる）という子どもたちのかわりのプロセスが明らかになった。ここでは、行為や状況の意味の転換がなされ、様々なかかわり方の可能性の広がりも捉えられた。

#### <活動の共有と自己・人・もののバランスのとれたかかわり合いの発展>

植物を育て、収穫するには、「こうすべき」というような課題が強く、大人から子どもへの一方的な（外接的）かかわりを誘いやすい。例えば種まきの場面では、子ども行為に即しながら、演示（種をまくしぐさを見せる）やことば（「種をばらばらっとすればいいのかな？」「種はちいさいから赤ちゃんみたい」と見立てるなど）をつかって複数のリーダーがかかわりあうことで方向性を明確にしていった。集団で「種の赤ちゃん」の成長のストーリーを共有する、繰り返し「大きなーれ」と行為を伴ったおまじないをすることなどで、子どもにも大人にもラディッシュに対して親しみや成長への期待が、ラディッシュの成長と共に見られていった。

#### エピソード2「映画館遊び」

C 児はひもを持ち、友達・リーダー1とながって電車ごっこをしている。リーダー1「M 駅に行こう。M 市だから、デパートに行こうかな。」C 児「映画館」。この言葉をきいたリーダー1は、映画館を3段舞台に園児椅子で作ろうとする。C 児「映画館の椅子はつながっているんだよ」など話し合い、C 児は他児とリーダー1と一緒に力を合わせて舞台に隙間なく椅子を並べる（図8）。25個の椅

子がずらっと並び、舞台はまるで映画館の劇場ようになる（図9）。

映画館ができると、リーダー2が「チケットです。何番の席ですか？」とお客さんになってやってくる。その様子を見た他児たちも舞台に集まってくる。やがて大型絵本「はじめまして」が上映され、歌とともにお話が展開される。

映画館の側にはままごとの道具がたくさん並んだ売店（ジュース・ポップコーン売り）、チケット売り（紙でチケットをつくり、売る）コーナーができ、部屋が1つの映画館のようになる。D児は売店コーナーから舞台に走り、売り子のようにジュースを売る。

何度か繰り返し絵本が上映されると、E児はリーダー1と一緒に絵本を支え、上映係を担う。

リーダー1は「次の上映には隣町の人たちが映画館に来ますよ。もうそろそろ夜なので、今日はナイトショーをします。」とお知らせをし、しばらくたつと親グループから母たちがチケットを持ってやってきて、母「ナイトショーだってー」と笑いながら席に座る。

最後に参加者全員で映画を楽しむ活動となる。



図8 園児椅子を舞台に沿って並び、映画館をつくる



図9 映画（絵本をスクリーンに見立てる）の上映を見る子どもたち

#### <リーダーのかかわりと技法>

- ① L1: C児の自発的な見立て、行為を活かして活動領域の設定、明確化し、コーナー活動展開のきっかけを子どもと共につくる（活動領域（コーナー）設定の技法）。
- ② L2: 舞台にできたコーナーの性質を察知し、「チケット」をつくり、子どもたちの人・物・空間とのかかわりを活かして内容の充実、発展をはかる。（コーナー活動展開の技法）
- ③ L3: 舞台のそばにできた売店コーナーでD児と一緒にジュースやポップコーンを作る。できたものをD児とどうやって売りに行こうかと話し合ったり、D児が売りに出かけているときにも、コーナーにとどまり、売店コーナーが継続的に劇場と交流し、関係が展開・発展するようにする（小集団交流の技法）。
- ④ L1: 集団の中で映画館遊びが全体活動として統合化され、さらに他集団と出会って拡大し、発展されるよう方向性を示し、場面・状況設定を皆と共に挙げる（集団統合化の技法）。

#### <関係性の発展>

この遊びの中で、L1がC児の自発的な行為に注目したことがきっかけとなり、1つのテーマ（映画館）を舞台と椅子を使って緻密に表現して、集団のなかでL1、L2、L3がそれぞれの技法を使いながら、3つのコーナー活動を連結していく経過が見られた。

### ＜内容の拡大、意味（質）の転換＞

子どももリーダーもそれぞれの働きかけでさらに場面が変化・発展し、それぞれの役割が生かされていく過程（内容創造性）を共有している。コーナー発展の過程で新しく「チケット」や「売店（ポップコーン）」などを遊びの中に取り入れていく過程は一人の見立てではなく、集団の参加者の行為化が重なり、まるで生活の一場面のようにその意味が充実していった。参加者複数のリーダーと子どもたちがかわることで集団が力動的に発展し、やがて3つのコーナーが統合化されて母子合同活動へとつながる流れとなっていった。

### ＜活動の共有と自己・人・もののバランスのとれたかかわり合いの発展＞

統合的な場面において、様々な人が集まり、「夜」「ナイトショー」という子どもとリーダーの場面設定も加わり、その状況では、笑う、わくわくするなどの感情が響きあい、活動の盛り上がりが見られた。自己・人・ものそれぞれがかかわりあいそれが基盤となって、個と集団の相即的發展が体験されていった活動であったと考えられる。

## 6. 考 察

就園前の2、3歳児を対象とする幼児グループは、子どもにとって家庭からさらに大きな集団の移行期にあたり、子どもの発達にとって、またその後の集団へのかかわりかたの基礎を培う点で大変重要である。

幼児グループ参加後の母親が記述した幼児グループでの集団体験の特徴や効果を見ると、①活動を共有し関係性の発展がなされること②活動内容の広がり、質的転換、創造がなされること③自己・人・ものがバランスよくかかわり合い発展すること、などが挙げられることが分った。

それは、四季・自然を生かした活動や成員の関係性・創造性を育みあえるような活動のねらい・内容の設定がありながら、参加者の多様なかわり方を認め、今ここであたらしく関係を築いている幼児グループの原理が集団の効果としてあらわれていたと考えることもできる。

また、2、3歳児の小集団活動においては、子

どもの内面を支え、自発的行為化を促すような複数のリーダーの（内接的）かわりもまた重要であり、それをきっかけに子どもたちの積極的な状況への働きかけもみられる。時には迷い、考え、立ち止まったり、喜んだり、感動したりといった、情緒的状況をも共有し、集団の共通基盤状況が明確化されていった（活動の共有、関係性の発展）ことが重要な意味を持っていたと考える。それぞれが集団のなかで大切にされ、安心していられることを感じ、ひとり一人のかわりにより活動内容が充実し、意味が転換する過程も見られ、集団全体も高まっていくような相互的、応答的（接在）体験が、未来へ向けての基盤となり、新しい集団においても共に育ちあいながら、その輪や体験を広げていくような力となっていくのではないかと考える。また、家庭とは違った環境の中で、様々な人（友達、リーダー、他児の母など）と出会い、また、いつもと違った場面で新しく母と出会う集団の中で、自己・人・もののバランスのとれたかわり合いが基盤となり、個がいかされながらダイナミックな人間関係が展開し、状況を共有する体験も、幼稚園などのさらに大きな集団に向かっていくために必要な力となっていくのではないかと考える。

## 7. 今後の課題

発足以来20年余り経過するなかで、親の集団に関する意識の変化や人間関係の希薄化など今日的な課題が明らかになってきた。地域とともに歩む子育て・発達支援はどうあるべきなのか、豊かな人間関係を体験できる、よい集団体験の場としての幼児グループ活動の運営の仕方、リーダーチームの担い方、親子を取り巻く環境について今後もさらに実践に基づき研究していきたい。

## 8. 謝 辞

最後に、アンケートに協力いただいた皆様、子ども家庭支援センターすこやかの皆様、そして幼児グループの実践を共にしてきた鈴木百合子先生、柳瀬洋美先生をはじめ、ご参加いただいている皆様に深く感謝を申し上げます。

## 引用文献・参考文献

- 1) 松村康平監修・編『児童臨床学－児童論文集－』（児童集団研究会, 1968)
- 2) 五味重春, 田口恒夫, 松村康平監修 幼児集団指導研究会編『幼児の集団指導－新しい療育の実践－』（社会福祉法人日本肢体不自由児協会, 1979)
- 3) 吉川晴美 幼児グループの理論と方法 『子育て発達支援－地域に開く大学として共に育つ保育活動から－』第 I 巻 5-14 (東京家政学院大学 児童学研究室 地域に開く子育て・発達支援研究会, 2001)
- 4) 義永睦子, 吉川晴美, 鈴木百合子『幼児グループ活動における人間関係の展開 I』（日本人間関係学会第 1 回大会発表要旨集, 1993)
- 5) 吉川晴美編『子育て発達支援－地域に開く大学として共に育つ保育活動から－』第 I 巻 (東京家政学院大学 児童学研究室 地域に開く子育て・発達支援研究会, 2001)
- 6) 吉川晴美編『子育て発達支援－地域に開く大学として共に育つ保育活動から－』第 II 巻 (東京家政学院大学 児童学研究室 地域に開く子育て・発達支援研究会, 2002)
- 7) 関係学会・関係学ハンドブック編集委員会編『関係学ハンドブック』（関係学研究所, 1994)
- 8) 吉川晴美, 花山美奈子, 田尻さやか他『ひとりよがりにならないための子育て支援とは』日本心理臨床学会第 25 回大会発表論文集 492, (2006)
- 9) 田尻さやか・吉川晴美『大学における子育て支援 II－幼児グループ活動のとりくみ－』日本保育学会第 60 回大会発表要旨集 388-389, (2007)
- 10) 無藤隆・今井和子他『幼稚園の 2 歳児の保育と子育て支援』（小学館, 2007)
- 11) 田尻さやか, 吉川晴美『幼児グループ活動における人間関係の展開 16－継続研究 1～15 の振り返りと今後の課題－』日本人間関係学会第 15 回大会発表要旨集 22-23, (2007)

---

(2008.3.28 受付 2008.5.19 受理)